埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

Thinking Space in Kenji Miyazawa

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-02-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 永嶋, 浩 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/460

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

賢治の思考空間

Thinking Space in Kenji Miyazawa

永　嶋　　浩
NAGASHIMA, Hiroshi

1．はじめに

Brooksは「人月の神話」の中で「プログラマは詩人のようでもあり云々」と言っている。詩人の思考はモノ作りに生かせるのである。そこで本論は具体的な詩人に宮沢賢治（以下賢治という）を取り上げて賢治の思考を探り、どのような仕組みで創造活動が行われたのかをシステム技術的視点で検討し、代表的な二篇の詩から思考空間の抽出を試みる。

2．基礎的背景

2.1　相補性

Bohrは「視覚的思考が言語的思考に先行する」ことを見い出し相補性原理[1)]を導き量子現象の理論的な解釈が後の量子力学確立に貢献している。賢治の家族は賢治を小学生の頃にすでに天才気質を感じ取っていたようであるが、父政次郎は感じつつも対峙する関係を保ち相補的立場をとる。相補的とは見方や思考に深化をもたらす。賢治は草や木や鉱物に興味を持ちその地質学を探求、石灰が鉄精製の耐火材に関与し、豊富な鉱物資源（金や鉄鉱石等）が東北の強さの根源と考え、その地勢を中央と地方の相補性にみている。それゆえ岩手がイーハトーブの創造地になる。

2.2　宗教を育む地域性

弟清六によると「兄は食事のときに恥ずかしがって恐縮しながら音を立てないように食べていた」といい、父政次郎からも「宿習の癖がとれなかった」との話があったいう。裏付ける事例を示すと、賢治は同僚の白藤慈秀と出張の途中に親戚の関徳弥に会ったことで関が訪問する星製薬の同行を勧められ、賢治らは工場見学も兼ねながら社内食堂で食事をする。その時の様子を関は賢治が後にも先にも今まで見たこともないような恐縮ぶりで、最後には星製薬に何かお礼をしたいと言い出すほど大変申し訳なさそうな顔をしていたと伝えている。

賢治の近所に日本救世軍山室軍平の妻になった佐藤機恵子がいる。機恵子と北大総長佐藤昌介（花巻出身）の妹輔子は同じキリスト教主義の明治女学校に学んでいる。花巻は仏教だけでなくキリスト教も早くから受け入れた土地柄がある。賢治が小学五年の時は機恵子と同級でクリスチャンの照井真臣乳が担任で、この照井は無教会主義キリスト教の内村鑑三の弟子になる。しかも賢治の父政次郎とは担任以前から親交のある仲でもある。また花巻には鑑三全集編纂に関わったクリスチャンの斎藤宗次郎がいる。宗次郎は質入れ

キーワード：創造活動、アンデルセン、モナド、存在
Key words　：creative activity, Andersen, Monade, Sein

のため賢治の店へきたり、賢治も応対したり、キリスト教についての教えを受けたり、農民芸術概論の批評を求めたりと互いに尊敬しあった仲である。さらに妹トシは帰省のたびに賢治らに讃美歌を歌ってきかせている。賢治の周りには度々参禅した曹洞宗報恩寺や下宿した曹洞宗清養院や浄土真宗徳玄寺、島地大等の法話を聞いた浄土真宗願教寺、英語や聖書を学んだタッピング牧師のいた盛岡教会、花巻には安浄寺、父政次郎の関係していた花巻仏教会等があり、仏教の高名な師である暁烏敏や米国宣教師マカルピンの講演、宗次郎の関係で鑑三が来花、機恵子の娼妓解放運動を目の当たりに見たりと賢治と全てが絡んでいる。あるとき父政次郎から「大きくなったら何になる」と聞かれた小学五年の賢治は「偉い人だけにはなりたくない」と言ったら怖い顔で叱られたので、さらに「寒いときは鍛冶屋になって暑いときは馬車屋の別当になる」と具体的に答えると、さらにカンカンになって怒鳴られた賢治は父政次郎に「そんな仕事をばかにするのですか。それが仏さまを信心する人の考えですか」と口ごたえをしたために母イチをやきもきさせてもいる。賢治と妹トシで飼っていたバッタが一匹亡くなった時にはバッタのお墓を造り、賢治は手を合わせ妹トシと二人でお経を唱え、残りの虫を全て逃がしている。賢治が「すべてものに命がある」ということを初めて意識した時期になる。

３．思考支援パラメータ

４つのパラメータ（中央公論、宗教、ロシア文学、科学）を取り上げ、それらが複雑に絡み賢治の思考を支援したことを示す。

3.1　中央公論からの影響

中央公論[2)]は明治二十年頃の西本願寺系の学校に学ぶ学生団体の機関誌「反省会雑誌」にまでさかのぼり、明治三十二年一月に当時英国にいた高楠順次郎の検討により「中央公論」と誌名を変えている。高楠は中央学院大学の前身校創設やエスペラント伝道にも深く関与している。明治三十八年二百号記念[3)]には夏目漱石、幸田露伴、泉鏡花らの小説が載る。明治三十九年十月には漱石の他に島崎藤村や国木田独歩らの執筆がある。明治四十年の五月高山樗牛、六月一葉女史、七月福沢諭吉翁、八月紅葉山人、九月正岡子規論、十月斎藤緑雨論、十一月新島襄論、十二月大西祝氏など人物論特集は当り、大町桂月や田山花袋ら執筆者に名を連ねた戸川秋骨は明治四十四年に「エマーソン論文集」上巻（玄黄社）を書いている。盛岡中学三年の賢治がそのエマーソンや中央公論を熱中して読んでいた時期になる。そこで徳田秋声、与謝野晶子、水野葉舟、眞山青果、花袋、小栗風葉、藤村、鈴木三重吉、永井荷風、小川未明、森鴎外、谷崎潤一郎、正宗白鳥、小山内薫、尾上紫舟選、木下杢太郎、田中穂積、戸水寛人、河上肇、内田魯庵、三宅雪嶺、大隈重信、尾崎行雄らを知る。さらに四年の賢治は丘浅次郎、本田精一、上田敏、後藤新平、福本日南、渋沢栄一、井上円了、波多野精一、中澤臨川、新渡戸稲造、井上哲次郎、長谷川時雨、高浜虚子、森田草平、杉村楚人冠、大谷繞石、松崎天民、巌谷小波、佐々木信綱、島村抱月、長塚節、早川鐵治らを更に知る。賢治にはこれらの人物が全てリポジトリされている。

大正二年九月中学五年の賢治はツルゲーネフを読んでいる。ツルゲーネフ掲載は明治三十八年四月の「森と野」や明治四十一年八

月の「ツルゲーネフの虚無主義」のため賢治は図書館等のバックナンバーでツルゲーネフ情報を知ったものと考える。

3.2　宗教からの影響

大正元年十一月三日の父政次郎への封書に「小生はすでに道を得候。歎異抄の第一頁を以て小生の全信仰と致し候云々」と賢治の記述がある。中学四年の賢治は歎異抄を熟読し、自分のものにしたと言う告白である。当時禁書であった歎異抄の再評価が清沢満之によって行われ、その門下生には暁烏敏、多田鼎、佐々木月樵らがいる。特に暁烏は賢治に影響を与えた人物である。賢治が暁烏に初めて会ったのは小学四年の時で父政次郎らが中心になって明治三十八年八月の第八回夏季仏教講習会を催したときになる。賢治は父政次郎の厳命により侍童の役を受け持ち、暁烏と散歩や唱歌をして空き時間を一緒に過ごしている。その時以来、暁烏から宗教に対する疑問や解らない用語を平易な言葉で説明を受けている。父政次郎は清沢の「精神界」の読者で且つ近角常観とも交流があり常観発行の「求道」の購読、さらには上京して教えも受けている。宮沢家には聖書もあり、「中央公論」の成り立ちを考慮するとこれも購読していたのかも知れない。

大正三年中学卒業後の九月店番時代の賢治は、父政次郎の法友高橋勘太郎から島地大等編「漢和対照　妙法蓮華経」を贈られ感動している。高橋は真宗の宗義や全仏教の教理の話がよどみなくでき、しかもカントやヘーゲル、スペンサー、エマーソンの名を口にして哲学を語り、驚異の思いをしたという明治四十年当時に会った多田による高橋の人物評がある。中学時代の賢治は愛読書が中央公論や哲学書であったという原点が高橋から読み取れる。賢治が早くから「宗教」、「文学」、「哲学」に馴染み、さらに「政治」、「経済」、「海外思潮」の情報に接していたことが、後の創作活動を支える重要な知識源になる。

3.3　ロシア文学からの影響

鴎外がドイツから帰国後（明治二十一年）辺りから海外文学の関心が高まり、明治二十年二葉亭四迷が「浮雲」発表の翌年にツルゲーネフ作品を訳し紹介している。これらが起因になりツルゲーネフの優れた自然描写の影響を受けたロシア文学ブームが起こり、後の賢治にも影響を与えている。賢治はトルストイにも興味を持つ。トルストイもツルゲーネフに近い自然の風景を扱っているが人間と自然の関係の中で感覚を重要視している。それは「復活」の中にみることができる。あるいはトルストイは宗教的な視点においても死の問題を常に抱えた形で描いている。それは「イワン・イリッチの死」の中にみることができる。トルストイが中央公論に掲載されたのは明治三十四年九月が最初で、明治四十年三月「トルストイ論」（宮崎湖處子）や明治四十二年二月「トルストイ」（上田敏）の他に臨川が大正元年九月、大正二年一月・二月に、さらに大正三年十月に魯庵も執筆している。

一方ドストエフスキーは、人間と自然が切り離された形で主人公の感情表現がなされている。そこには思考の極みが文章表現されている。例えば1864年作の「地下室の手記」[4)]では「略…どんな本源的な原因をもってきても、たちまち別の、さらにいっそう本源的な原因がたぐり出されてきて、これが無限につづくことになるだろう。そもそもあらゆる意識ないし思索の本質はまさしくそういうもの

なのだ」の記述があるほどである。ドストエフスキーが中央公論に掲載されたのは明治四十二年三月の「ドストジエウスキイの病気」（富士川游）が最初になり、その後は昭和十年辺りでも見当たらない。

ドストエフスキーはアインシュタインをして「彼はどんな思想家よりも多くのものを、すなわちガウスよりも多くのものを私に与えてくれる」[5]とさえいわしめるほどの作品を残している。賢治はツルゲーネフやトルストイから自然の描写を学び、ドストエフスキーから「思考とはどういうものか」ということを学んでいる。この他チェホフにも注目して「マサニエロ」作品で取り上げ、「蘆の穂は赤い赤い／（ロシヤだよ　チエホフだよ）」の表現があるほどである。チェホフは医者であり作家であり無償の奉仕活動家でもあり、賢治は刺激を受けたものと考える。

3.4　科学からの影響

賢治に科学で影響を与えた人物に丘浅次郎、片山正夫、関豊太郎がいる。中央公論によく名を連ねた丘は「進化論講話」や「生物学講話」を著し、中央公論の大正二年九月には「死の研究」特集の中で「生物學上より観たる死」を執筆している。十月も同じ特集があり、島地の「佛教より観たる死」などが掲載されていて賢治には興味ある特集だったと考える。片山の「化学本論」からは「質量不変の定律」など最新の科学技術を学び、関教授からは地質や土壌や肥料を専門に学び、「教えることは何もない」と言われるほどである。

昭和二年の盛岡中校友会誌向け原稿に「生徒諸君に寄せる」がある。この詩の断章六には「コペルニクス」や「ダーウィン」の名称、断章七には「マルクス」の名称が使われている。賢治は教えていた時の様子でわかることであるが、例えば黒板で説明していた時「これはノートに写し取ってはならない」というなど未だ自分の考えが不十分の場合には公にしないという心構えがある。つまり、この詩で使われている人名は理解して使っていることになる。賢治の意識は宗教と科学と自然と美にある。「科学が宗教に出会うこと」というのは例としてアインシュタインや湯川秀樹の両博士に見られるが、ここまでの賢治を「宗教が科学に出会うこと」として捉える。

3.4.1　ダーウィン

賢治が小中学で熱中した鉱物採集に学んだ多様性はダーウィン[6]からも学んでいる。ダーウィンが科学者の目で観た自然界の生と死のモデル図による視覚化に目を見張り、ダーウィンの見方からも自然と科学の関係を学んでいる。ダーウィン自身はアダム・スミスの「国富論」から「見えざる手」に値する自然淘汰のアイデア、マルサスの「人口論」から適者生存のアイデアなどのヒントをつかんでいる。小学三年生のとき担任の八木英三先生からはアンデルセンにみられる外国の童話を聞かされ、外国人作家や偉人について興味を持ったことは、賢治が成人してから八木先生に列車の中で偶然会った時の会話の中からも読み取れる。賢治はダーウィン記述の所で「銀河系空間の外にも至って更にも透明に深く正しい地史と増訂された生物学をわれらに示せ」と言っている。学生には地球上だけでなく全宇宙を捉え、旧約聖書の創世神話に対して科学的に説明できるような宇宙の成り立ち、生命の誕生、進化の過程を明らかにすることを求めている。現在の我々にも問いかけられている根本の問題でもある。

3.4.2　コペルニクス

コペルニクスは、十分に慎重な期間をおいて1543年の没年に「天体の回転について」を著し、地動説を公表した人物である。賢治はコペルニクス記述の所で「余りに重苦しい重力の法則からこの銀河系統を解き放て」と言っている。すでに確立していたものに対しても、もう一度新たな視点で思考することを説き、学生に「コペルニクス的転回」が図れる先駆者となるようにと「見方の転回」を促している。コペルニクスの主張は当時の教会の権威に対する挑戦にもなり、ガリレオも宗教裁判において有罪になるほどで、そのような状況において賢治の指摘はガリレオではなくコペルニクスであったことに注目しなければならない。賢治がコペルニクスを取り上げた理由は、コペルニクスが太陽と地球の二つの物体の運動を観測するときの座標系を地球から太陽に移したこと、つまり賢治は重力が星や銀河を生み出し天体の運動を支配するニュートンやガリレオの古典力学を見据えていただけではなく、ケプラーの三法則やアインシュタインが重力と慣性力が等しいことを示した一般相対性理論の中にコペルニクスの重要性を見たのである。大正十一年のアインシュタイン来日は賢治が花巻にいても注目していたものと考える。事実1924.8.17付け詩の原稿用紙の裏側には、「ニュートン先生」や「アインシュタイン先生」の記述がある。二年余り時間が経過しているが、それは賢治の宗教の道づれでもある妹トシが亡くなった年でもあることによる。

3.4.3　マルクス

マルクス[7]はベルリン大学でヘーゲル哲学の研究に熱中していたが、途中からヘーゲル哲学の根幹である「精神」の展開過程において制約を与える宗教や君主制国家と結びつくような客観重視の考え方を批判している。所謂、マルクスのヘーゲル哲学批判である。マルクスは、ダーウィンやフロイトと並ぶ二十世紀の人類に最も影響を与えた思想家でもある。賢治はマルクス記述の所で「盲目な衝動から動く世界を素晴らしく美しい構成に変えよ」と言っている。貨幣による経済的疎外からの脱却あるいは疎外された労働からの脱却を問い、人間の本質を考えて新しい価値世界を構築できるような人材の輩出に期待を込めている。マルクス自らは思想の裏付けとしてダーウィンの進化論の考え方を採用していて、エンゲルスはマルクス葬儀の時に「ダーウィンが生物界での進化の法則を発見したように、マルクスも歴史における進化の法則を発見した」と弔辞を述べたほどである。賢治も「ロシアへいってみたい」と思った時期があったようである。それは「世の中の思想の衝突や小作争議などを何とか平和に解決してやろうと思うのです。ロシアを見れば何かの参考になると思います」という真剣な思いからの研究熱心さゆえからである。賢治はカウツキー著「マルクス　資本論」高畠素之訳を全五巻と付録を持っていて読んでいる。

4　賢治の意識

賢治を「宗教が科学に出会うこと」として既述したが、実際は「宗教と科学に同時並行的に出会うこと」というのが正しい捉え方ではないのだろうか。幼少時から昆虫や鉱物の採集、星座の由来にいそしみ、自然界を良く観察していたことが土台になり、自然科学の知識をそうとう身に付けている。盛岡高等農林時代には「化学本論」が座右の銘となる。

そのため賢治は宗教を突き詰めると同時に科学も突き詰めていて、どちらからの視点でも世の中を見る力を兼ね備えていたものと言える。しかし、賢治は三才の時から「正信偈」や「白骨の御文章」を暗唱しているがゆえに、生まれた時から意識せずに宗教が身に付いているものとみなせ、そのため思考に置いて宗教をベースに考えたり、科学をベースに考えたりあるいは両分野を組合せたり変幻自在の思考空間を持っていたものということになる。従って「農民芸術の興隆」に「宗教は疲れて近代科学に置換され然も科学は冷たく暗い」と言い、当時の状況を両視点で把握している。

4.1　自己評価

賢治自身は羅須地人協会時代に自分の宗教レベルを親戚の関に語ったところによると、「自分も十二才や十三才頃から一切経を読めるようだと良かったのだが、今からでは到底ものになる見込みはない」というほど高い志での厳しい自己評価をしている。さらに詩作についても草野心平が大正十四年七月頃「銅鑼」への勧誘をしたことに対して草野宛の返信に「わたくしは詩人としては自信がありませんが、一個のサイエンティストとして認めていただきたいと思います」と記しているほどである。

賢治はものごとに対する意識レベルに自分なりの基準がある。「まだまだ」と「完璧」というレベルである。「春と修羅」出版後の時点においても詩作を「まだまだ」のレベルと感じており「完璧」のレベルに引き上げるためにオルガンやセロを密かに練習していて、詩作に役立つツールと位置付けたこれら楽器を新交響楽団やその専門家大津三郎にみてもらっている。大正十五年十二月十二日付け父政次郎宛の手紙に「略…十六頁とうとう弾きました。もうこれで詩作は、著作は、全部わたくしの手のものです」の記述があり「完璧」のレベルになったことを宣言している。

4.2　知識獲得の手法

賢治は当時90円の給与を三日で使ってしまうほどに書籍購入をしている。実際には見て見ぬふりのできない賢治ゆえに給与のいくらかを他人への施しに使ってしまうことがあり、施しの方が第一義的な使い道で本代は残ったお金でという具合でいつも財布が空っぽの状態にある。賢治の生み出した借金は没後に全て弟清六が清算している。このような状況のため賢治は知識を身に付けるべく時間を惜しんで真剣な努力を傾けている。しかも賢治は医学書から自分の余命を知り全力投球している。賢治は斜読法の速読で本を読み、一度読むと忘れないという能力があるため次から次へと読書している。それは紙という紙すべてで地区内の回覧版から校友会誌から専門書にまで及ぶ。書籍は自分の専門分野の農学（土壌学／肥料学／鉱物学他）をはじめ、理系の化学や数学、工学（電気／電子／量子他）、医学（解剖学／生理学／健康法他）、文系では地理（世界地理風俗体系他）、歴史（西洋全史他）、思想（芸術論／美学／哲学／世界大思想全集他）、音楽（音楽の思想と法則／楽譜他）、美術（世界美術全集他）、文学（日本文学／世界文学／古典他）、辞書（漢和／英語／仏語／ドイツ語／梵語他）、宗教（仏教／経典／聖典／聖書他）、洋書（化学地質学の原理／代数学論考／エスペラント／スタインメッツ／アンデルセン／ホーソーン／ヴィルヘルムオストワルド／ハヴロックエリス／サッカレー／バーナードショー／ルイス

キャロル／シェイクスピア／モーパッサン／バルザック／ゲーテ／ディケンス／ヘッケル他）だけでなく学術研究書や文芸雑誌、浮世絵関連など広範囲で全集や辞書に関しては全巻すべて揃えて全部読んでいる。賢治は中里介山の「大菩薩峠」五冊や七冊を二時間や三時間で、千頁の専門書を一ヶ月で読んでしまうほどの読書力がある。そのため書店に行くと一回に付き十五六冊を買い込み、読んでしまうと古本屋に売ったり、人にあげたりして手元に残るのは稀である。例えば賢治にとって改宗するほど宗教の方向性を決定付けた重要な「漢和対照　妙法蓮華経」を除籍処分になった友人の保坂嘉内に贈っているほどである。

難解で重要な内容については読み返すこともしている。例えば田中智学の「本化妙宗式目講義録」五巻は五回読み返している。羅須地人協会における講義では「農学校の教科書を二年でやるなら半年位でやりたい。化学を一年かけるなら五時間位でやりたい」という実践的な考えの持ち主で「ものごとのポイントを押さえる」ことを常に考え、例えば詩についてもチェホフは「三行で表現できる」と言い、自分の詩の音律を解決すれば文学博士になれるとまで言っている。日本文学は万葉集や古典から島田清次郎までリサーチをかけ、外国文学は例えば「アンデルセン」といえば「キルケゴール」まで絡めた思考を働かせ、科学では「ニュートン」といえば「ライプニッツ」というように知識の糸を絡めながら延ばしていく手法をとる。

4.3　詩作の考え方

賢治の首からぶら下げたシャーペンで深夜神輿が鳥谷ヶ崎神社へ帰る秋祭りの光景を描写しようと手帳に何か書いているときに何かの拍子で芯が折れてしまい再度挑戦したりしていたが、「今日はダメだった」というほどの集中さと瞬間さを必要とする手法で詩作している。これが心象スケッチである。賢治は「白秋、藤村、野口米次郎、蒲原有明、佐藤惣之助、萩原朔太郎など現代詩人の作品は全て読みました」といい、その上で「自分から全ての詩集を取り除き、どの詩風にもないスタイルで詩作すべき」という考え方をとる。初期は土岐哀果や啄木の三行書きに影響を受け、後には「白秋は偉い」と尊敬する白秋の詩を採り込んだ「とらよとすればその手からことりはそらへとんで行く」を自分好みに変えた形で「習作」の中で表現、朔太郎の「月に吠える」も心酔している。

小学生の時に知ったアンデルセン童話は、アンデルセンという人物にも興味を持ったようである。アンデルセンは「ホルム運河からアマール島の東端までの徒歩旅行」という作品がある。歩いているときに見聞きした心象を「意識の流れ」[8]として捉え文章にしている。賢治もアザリアメンバーと同様の徒歩旅行を行い、大正六年に「秋田街道」という作品にしている。しかも賢治はアンデルセンの「月は何でも知っている」かのごとくの視点に着目している。「絵のない絵本」の「第二十八夜」には月が海と白鳥を見た描写がなされ、その中には「エーテル」の単語もある。賢治はこの詩を読んで大正七年に白鳥に関する短歌を作成している。自分の家を持たず流浪の詩人であるアンデルセンは月に語らせ、世界を旅する表現をしている。賢治は家があるが意識はこの世のみならずあの世へ、そして宇宙へも旅をしながら一刹那の視点で詩作している。

4.4　科学が宗教に出会うこと

アインシュタインの宗教を意識する基本的な考え方は、「Certain it is that a conviction, akin to religious feeling, of the rationality or intelligibility of the world lies behind all scientific work of a higher order.」であり、しかも「神を信じるか」の問いに対してアインシュタインは「私の神の概念は通俗的な言葉でいうと、汎神論的な立ち位置にありスピノザの神と評されるかもしれない」と言っている。さらに「死の間際において自分の人生をどう捉えるのか」の問いに対しては「興味を持たない。所詮、私は自然のちっぽけな粒子でしかない」と言う。

デカルトを研究したスピノザは、「唯一の実体は神であり、それは永遠にして無限の存在」とした汎神論や心身平行論を示し、モナドロジー[9]のライプニッツも科学的精神に重きを置くこれら合理論者と同じ範疇に入る。

ここで賢治の場合はどうなのかと考える。これまで最初は賢治を「宗教が科学に出会うこと」に分け、次にそれを見直して「宗教と科学に同時並行的に出会うこと」として捉えてきた。しかし「科学より信仰への小さな橋梁」の思索メモから解るように自らをサイエンティストと意識した科学の眼で宗教を捉えることを行っている。つまり「科学が宗教に出会うこと」になる。生物や物質も含めた我々の住んでいる世界は、原子同士をまとめるマクスウェルの法則の電磁気力の作用する分子でできている。賢治は電子から原子、そして分子に至る構成を知っている。さらに電子のある世界を電離した宇宙空間の中に捉え、真空を異単元とした異空間的存在として意識している。デモクリトスのアトムと空虚な空間の賢治版として考えることができ、宗教的な意味合いでは天以外（例えば餓鬼）と天を現実世界と異世界に対応させている。デモクリトスの考えはBohrにも影響を与えている。

湯川は自らの著作集６にある「詩と科学」という小題の中で「略…どちらも自然を見ることと聞くことからはじまる。略…詩と科学とは同じ所から出発したばかりでなく、行きつく先も同じなのではなかろうか」と言い、Bohrも「詩の言葉と原子に関する言葉は明らかに等しい」と言っている。世界の物理学者湯川はエスペラントも学習している。空海や荘子や三重吉も読んでいる。そこに賢治の名は出てきていないが、賢治も詩と科学の創作ミックスは意識したものと考える。

５　思考空間

「真空溶媒」と「青森挽歌」で採られた賢治の思考空間を示す。

5.1　賢治のモナド

中学二年になると岩手山に登りはじめ約十年間で三十回以上の登山を行い、座禅を組んだり思考を巡らしたり五感を研ぎ澄ましたりして一晩山で過ごすことを度々やり、まるで修験者のようであり、そういう中で賢治は自然も植物も動物も一生懸命生きていること、それは太古の昔から現在に至るまで星の運行や鉱物の成り立ち、さらに植物や動物の誕生にまで思いを馳せている。賢治は漆黒の中に星を見、動物の鳴き声、樹木の揺れ、風の音を聞くことが思考の重要な契機と捉える。鉱物内の極微の世界の結晶をみることは悠久の時間の広大な空間をみることに相当していることを把握し、銀河をみることは我々の体の仕組みを分子レベルで考えることに相当していることを自然の営みとして実感する。この賢治の考え方を確固たるものにするため華厳

経やライプニッツから学んでいる。

賢治は独断に陥ることを避けるためあらゆる宗教宗派を学ぶように接してきている。そのため天台大師智顗[10]が華厳経から「微細世界が即ち大世界であり、大世界が即ち微細世界であり、少世界が即ち多世界であり、多世界が即ち少世界である」という一念三千の思想を学び十界互具の思想を打ち出したりしたことは、ライプニッツのモナドロジーに似ているものであるとの感触を賢治自ら感じたものと言える。歴史的には馬鳴→竜樹→世親の流れをくむ華厳の教えは一即一切、重々無尽を説きあらゆるものに神が宿る立ち位置にあり、一木一草にも仏性をみる。天台の教えは竜樹も絡むため華厳の流れがあり、一切皆成、山川草木・悉皆成仏を説きあらゆるものに仏性をみるが、あらゆるものに地獄の性もあるとみる。

賢治の特徴は「全てを調べ尽くす」という姿勢にある。賢治はニュートン絡みでライプニッツを知っている。賢治が持っていた萬國人名辞書には、ニュートンの項目に「英国の大哲学者、兼数学の大家」と記され「幼年の頃から詩に興味を持ち、数学はなおさらである」とあり、さらにケンブリッジで光学の研究を行い「光と七色の関係を発見したものの批判も多く承知しなかった者も多くいた」旨の手紙をライプニッツに送ったことが記されている。この時点で賢治は「両者は知り合い」ということを知る。ライプニッツの項目に「ドイツの大哲学者、ニュートンと微積分法の先取権争いをしたこと」、地質学に関する著書「プロトガイアを著したこと」等が記述されているためライプニッツに興味を持ち、さらに調べてモナドを知ったものと考える。

大正十一年度学期末試験の成績発表で呼び出しを受けた松田奎介に「この科目は丁ですね。どうしたのです」と問われた松田は「勉強しなかったんです。好かねえから」と言ったことに対して賢治は「ニュートンは理学者です。ですけれども文学も大したものがあります」[11]と諭している。このことが萬國人名辞書をよく読んでいる証拠になる。しかも賢治は大正十五年に花巻農学校を退職して羅須地人協会設立後に入手した昭和二年世界大思想全集にはプラトン、アリストテレス、デカルト、ライプニッツ、ニーチェ、シラー、マルクス、カント、マルサス、フィヒテ、エマーソン、フロイト、ショーペンハウェル、トルストイ、ダーウィン、スペンサー、キルケゴール、ベルクソン、タゴール、ヘーゲル、スピノザ、アインシュタイン、モリス、ラスキン、ツルゲーネフ等が載っている。これら人物と同じ名前が「農民芸術の興隆」や「農民芸術の本質」の原稿メモに数多く書き込みがしてあり、それまでに哲学を相当学んでいたことがわかる。

賢治が羅須地人協会の場所にした下根子の家は、二階建てでそのうちの一階の内装が見たこともないような飾り方がなされていたようである。それはあたかもドゥルーズが示した「バロックの館」そのものの感じのように受け取れる。賢治の場合は一階が農学校の「種山ヶ原」の演劇で用いた幕を一度川で洗いカーテンのように切ってはり、襞構成にして合わせ目に太い縄が間をあけて吊るされ、窓を見せない造りにしてあったようである。しかも窓側には新しい雪靴が間隔をおいて並べてあったようである。賢治は二階をお客が来たときもてなす空間にしていることと自らの思考の場にしている。つまり雪靴を置くことで土中を一階とみなし、実の一階を二階の構

成にして「バロックの館」を具現化してある。ちなみに実の一階はある時期妹トシが病とたたかい療養し、賢治が看病した場所でもある。そのため賢治はこの時点でライプニッツの哲学を十分理解していたものとみなせる。とりわけ「モナド」に関しては大正十一年早々には把握していたものと考える。

5.2　思考空間Ⅰ…真空溶媒
（Eine Phantasie im Morgen）

この詩は賢治の深い知識が組み込まれ構成されている。そこには宗教と科学と自然と美のほかに哲学が入っている。そのため一般における詩の構成とは異なる内容を持っている。哲学にはモナドロジーの考え方が組み込まれ賢治における集大成ともいえる詩になっている。尚、記号「⇆」は双方向、「→」は単方向の会話を示す。記号無しは自己遷移を表す。

１）「起」本文

融銅はまだ眩めかず／…／その一本の水平なえだに／りっぱな硝子のわかものが／もうたいてい三角にかはって／そらをすきとほしてぶらさがっている／…／いまやそこらはalcohol瓶のなかのけしき／…／むかふを鼻の赤い灰色の紳士が馬ぐらいあるまっ白な犬をつれて歩いていることはじつに明らかだ／

２）「途中」構成

①括弧文Ａ（？）⇆Ｂ（紳士）・本文・②括弧文Ａ（？）⇆Ｂ（紳士）・本文・③括弧文Ａ（？）⇆Ｂ（紳士）・本文・④括弧文Ｃ（？）→Ｄ（牧師）・本文・⑤括弧文Ｃ（？）⇆Ｄ（牧師）・本文・⑥括弧文Ｃ（？）⇆Ｄ（牧師）・本文・⑦括弧文Ｃ（？）→Ｄ（牧師）・本文・⑧括弧文Ｃ（保安掛り）→Ｄ（牧師）・本文・⑨括弧文Ｃ（保安掛り）←Ｄ（牧師）・本文・⑩括弧文Ｄ（牧師）・本文・⑪括弧文Ｃ（泥炭）⇆Ｄ（牧師）・本文・⑫括弧文Ａ（牧師）⇆Ｂ（紳士）

３）「結」本文

おれはたしかに／その北極犬のせなかにまたがり／犬神のやうに東へ歩き出す／まばゆい緑のしばくさだ／おれたちの影は青い砂漠旅行／そしてそこはさっきの銀杏の並樹／こんな華奢な水平な枝に／硝子のりっぱなわかものが／すっかり三角になってぶらさがる

４）分析

起承転結の「起」と「結」の間を「途中」構成として扱うと、賢治の言わんとしているのはこうである。③の本文では「自然の理不尽」を憂い「神の行為をうらむ」心境にある。⑥の本文では腐った駝鳥の卵からSH_2とSO_2からＳ（硫黄華）を導き出している。しかも賢治は「仮死」のことを取り上げている。2006年に生化学者Mark Roth[12] は実験から致死量に近い硫化水素の中に哺乳類動物をさらすと「仮死状態」ができることを見つけ、恒温機能を持つ哺乳類なのに変温動物に変化し、あたかも死んだようになり硫化水素にさらすのを止めると、正常な機能に回復することを確認したというのである。このため「生」と「死」の中間状態が存在するのではとして医学分野にその応用の期待が持たれた状況がある。賢治は「生」と「死」の中間状態がある立場をとり「黄いろな時間だけの仮死ですな」の一文を使っている。⑦の本文では「保安掛り」が盗みをやるという「社会の理不尽」から「矛盾の原理」が働いていることを指摘しているが、雨が降ることによって矛盾を取り除く「神の行為をほめる」心境になる。雨は神の行為によって降らされた含意がある。⑨の本文では保安掛りは罵倒されたことによってひとかけの泥炭に姿が変わり、「存在者は変

化を免れない」ということを示している。言葉は「精神」であり、保安掛りは「物質」であり、これに時間を絡めると精神は生き残り、物質は炭になり土に還ることを意味し、精神は物質に優ることが表現されている。⑩の本文では「ひかりはすこしもとまらない／だからあんなにまっくらだ」とか「太陽がくらくらまはってゐるにもかゝわらず／おれは数しれぬほしのまたたきを見る」ここは星の光がまだとどかないほど広大無辺な宇宙の存在、しかもたえずモノの存在を意識している。⑪の本文では「変化はゆるやか」といい、このことから「自然は跳躍しない」ということを示している。ここにモナドロジーの主なる考え方が入っている。そして零下二千度の「真空溶媒」が「モナドの運動」に相当し、「どうせ質量不変の定律だから」とは本質は変わらないということであり、「神の計算」が働いている予定調和を指し示している。「といったところでおれといふ」のここにモナド的表象の表現が使われ、例えば「おれはアルコール瓶の中のけしきであり」、「おれは蟻であり」、「おれは牧師であり」、「おれは星をみる星でもあり」、「おれはひかりを見るひかりでもあり」、「おれは風をみる風でもあり」、「おれは空気をみる空気でもあり」と言える。これらは「多」を含みかつ「多」を表現している推移的状態にあたり、「一」における「多」の表現の入れ子宇宙を示している。⑫ではA（？）の？は「牧師」ということがわかる。

5.3　思考空間Ⅱ…「青森挽歌」

CPUのINT機能を当てはめて文章構成を考える。括弧文はINTとして扱い、二重括弧文はプライオリティの高いINT（優先）で表す。INT（優先）の二重括弧文は賢治の別な意識の表象になる。記号「✓」は分析を示す。尚、本文の区分けは省略する。

１）「起」本文

こんなやみよののはらのなかをゆくときは／客車のまどはみんな水族館の窓になる／✓「生の領域」を指し現在列車で移動中となるが、夜の存在と想起で別な世界へ入り込んでいく。

２）「途中」構成（分析含む）

①括弧文・本文・✓「巨きな水素」は宇宙空間を意味し、地球は宇宙空間の中の一つとして捉えている。「りんごのなかをはしってゐる」とは現実空間の「青森」を指している。

②括弧文・本文・✓「…陰影だけ」とは実体はないものの「月夜のでんしんばしら(1921.9.14)」の情景を思い起こしている。「あをじろい駅長」とか「駅長のかげもない」とは実体のない「死の領域」にいる「死者の駅長」を表現している。

③括弧文・本文・✓死者の境地へいざなう擬死化の技法を「夜」の存在と「ねむり」の状態で生み出す賢治の感覚がある。「夜」の存在はあたかもハイデガーに学んだごとく独自の思考で展開し、「ねむり」の状態はフロイトに学んでいる。

④括弧文・本文・✓水いろとは「空」の水色や「川」の水色を指し、「空」の水色では宇宙空間の空虚さ、「川」の水色では、多くの死体が流れていた川のおどろおどろしい歌稿「青びとのながれ」をイメージし「恐ろしいあの水色」のフレーズを使っている。そして「早く浮かび上がらなければならない」という賢治の思考における決意が表明されている。汽車から見える景色は進行速度と見ているものが相対的に知覚される関係にあることを指している。

⑤括弧文・本文・✓昼過ぎの時点ではカーキ色の作業服を着て学校で農業指導をしていたことを夜の現時点で振り返り、今日の日照対策をした農作業のくたくたの自分の体の疲労感を「赤いポムプ」と名付けた太陽を昆虫採集のイメージで捉え表現している。

⑥括弧文・括弧文内二重括弧文・本文・✓賢治は妹トシを「せわしい道づれ」と指摘した別な意識のINTの中に「悪い叫び」の声を発するもの二重括弧文INT（優先）をネストさせている。「…さびしくあるいて行ったらうか」に見られるように妹トシに対する賢治の心配の思考から次のINTへ入る。

⑦括弧文・二重括弧文・本文１・本文２・二重括弧文・本文３・二重括弧文・本文４・✓華厳のように「草や沼」、「一本の木」を使い、これらにさえ見える仏性を表現している。そして「…／かんがへださなければならない」のテーマに賢治の心構えが見える。これが賢治の哲学になる。✓「感ぜられない方向云々」に見られる頭がぐるぐるする位だという賢治の訴えに妹トシからも同意されたような立ち位置で死に際の妹トシを描写していく。その描写は克明であると同時に彼岸に対する自問自答もしている。賢治はときに死者の眼になって彼岸への旅立ちを捉えている。まず妹トシは「意識がなくなり」、「我々の声を聞かなかった」、「呼吸が止まり」、「脈が打たなくなり」、「…眼がなにかを索めるように空しく動いていた」、そしてついに「我々の空間を二度と見なかった」と。そのとき妹トシのおかれた状況は「幻視」、「幻聴」、「夢幻」の世界にいたものと考えた「生」と「死」の間の「中有」の表現をしている。最後に賢治が妹トシの名を「力いっぱい叫んだとき、二へんうなづくように息をした」そしてそのことを賢治は確かに「うなづいた」という感触で捉え、死後の霊魂の扱いは「私にお任せください」と言う第三者風の叫び声を使い賢治は宣言している。

⑧括弧文・本文１・二重括弧文・本文２・✓賢治は寝ずに宗谷海峡を越える船上で旅立ってしまった妹トシとの通信を試み、この状況を夢ではないと確信する。一時の悲しみを抱いていてもそれは無常で時とともに薄れていくことを賢治は知っている。それは「悲しむなかれ」と言った仏陀の教えから学んでいる。妹トシの周辺風景、さらに身体や着衣について賢治の受けた感じで表し、そして賢治は「妹トシの跡をさへ訪ねることができる」と断言してあの世の世界の情景を描写している。そこには極楽と地獄のそれぞれの世界が表現されているが、賢治は妹トシがどちらの世界に行ったのかについては触れていない。このような解けない問いを思考するやり方は、生成する流れの中に入り込んでいくベリクソン→ドゥルーズの「内在」にも似て刹那滅に通じる。

⑨括弧文・本文１・本文２・二重括弧文・本文３・二重括弧文・本文４・二重括弧文・本文５✓賢治は存在しないほどに隠れているものが現れてくる風景に「夜の存在」があると言っている。つまりそのため見えないものが見えていると言っている。夜が明けて妹トシの死んだことが夢ではなく現実だと意識した場合には「これは何々だというカテゴリー化」の概念化が図れ、フロイトの言う防御機制が作用するものだということを承知している。一方概念化していつまでも固執していてはいけないことも理解している。そこで「具舎」を取り出している。「具舎」（世親の「阿毘達磨具舎論」を指す）が「ついこの間のように

云うのだ」というように過去・現在・未来の時間と空間の中で妹トシの死を受け入れること、それは自分の中の妹トシを全て失うことではなく「嘆き悲しむのは無益だ」、「自分の力ではどうにもならない」と悟って煩悩を断じ、悲しみに捕われるのを二度と繰り返すことなく、悲しみを超越して心の安らぎを得る道を選ぼうとする宣言をしている。✓軟玉とはりんごの木を指し、銀のモナドは星光を指している。「すべてあるがごとくにあり」とは世界における一切の事柄であり記憶を持ち合わせているものになり、これが「魂」に相当するモナドになる。「かゞやくごとくにかがやくもの」とは物体は実体ではなく現象にすぎないものということであり、これが「物体」に相当する非連続なモナドの集合を意味している。そして「人間というものは煩悩を呼び起こすもの」として賢治の妹トシに対する態度は決まっているにも関わらず賢治も「人の子」としての例として、最後にもう一度妹トシの死に際の様子をINT（優先）を使ってリフレインして見せている。✓ライプニッツを引用しながら妹トシにのしかかる無限の空間と時間は武器になるとともに漆黒の宇宙空間の持つ無限大の恐怖や無限小の恐怖というものがあることを指摘するが、賢治の宗教観の「まことは楽しく明るいのだ」ということで恐怖を取り除こうとしている。そして賢治はINT（優先）によるラマルクやダーウィンの進化論を背景に「みんな昔からの兄弟」という結論に達し、妹トシだけでなく全ての生きとし生けるものに対して無量の慈しみの心を持つように心掛けなければならないと結んでいる。

6．まとめ

「真空溶媒」では「その一本の水平な枝に／…」から「…／すっかり三角になってぶらさがる」の時間経過の中に地上から宇宙まで、過去から現在までを俯瞰した形に凝縮し「神」と「人間」と「世間」を思考空間の構成要素にして詩作している。「硝子のわかもの」は天体の元素組成を考慮すると太陽が昇る直前の月を意味し、一瞬の中に歴史を凝縮し太古も今も変わらない自然の仕組みの中で生きている我々人間の本性を表現している。煩悩は尽きないが人間の基本的な生き方において大切なのは「人の心がよくわかる」ほどに「意識」をみがくことにあるとしている。高価な犬を見ず知らずの者に貸してくれる赤鼻神士のように。

「青森挽歌」では樹齢（生命誕生）四十億年のリンゴの木の上で起きている日常の出来事、それは「生」と「死」の中で我々梢はどのように生きて行くべきかを思考空間の概念要素として詩作している。その中で妹トシの死を追求することで得られたことは「心のやすらぎ」が大切であり、すべてのものに対して差別することなく接すること、それは「行為としての実践」が大切であることを示している。

賢治の「思考空間」は「心」と「モノ」、言わば森羅万象を幾重にも織りなしてあり、有限の中に無限が存在する。つまり賢治は「生は死であり、死は生であり」というシームレスな思考の創造活動を暗中模索しながら行い、賢治の「心」を支えた「国訳妙法蓮華経」を知己の方々へ「モノ」として千部配布してほしい旨の遺言をし、そして臨終際の「また起きてから書きます」と言った言葉「精神」で

全ての思考を表現したことに尽きる。

尚、本論をまとめるにあたり参考文献に記したライプニッツの他にもキルケゴール、ベルクソン、ホワイトヘッド、ハイデガー、ドゥルーズ等の力を借りて検討したことを付記しておく。

参考文献

1）W.Pauli, 藤田純一訳『物理と認識』, 講談社, pp.123-141, 1975

2）三浦朱門,『中央公論100年を読む』, 中央公論, pp.1-40, 1986

3）中央公論社編,『中央公論総目次』, 中央公論, pp.3-155, 1970

4）ドストエフスキー, 江川卓訳『地下室の手記』, 新潮社, pp.28-29, 1993

5）B.Kuznetsov, 小箕俊介訳『Einstein and Dostoyevsky』, れんが書房新社, pp49-83, 1985

6）Jeremy Rifkin, 竹内均訳『エントロピーの法則Ⅱ』, 祥伝社, pp.93-116, 1983

7）高島善哉監訳,『世界の大思想Ⅱ-４』, 河出書房, pp.96-119, pp.166-185, 1967

8）R.Godden, 山崎時彦他訳『アンデルセン』, 偕成社, pp.172-188, 1994

9）G.W.Leibniz, 下村他監訳『ライプニッツ著作集後期哲学』, 工作舎, pp.205-244, 1989

10）梅原猛,『梅原猛著作集５　仏教の思想Ⅰ』, 集英社, pp.184-202, 1982

11）続橋達雄編,『宮澤賢治研究資料集成』, 日本図書センター, pp.84-85, 1990

12）P.Ward and J.Kirschvink, 梶山あゆみ訳『生物はなぜ誕生したのか』, 河出書房新社, pp.39-82, 2016

13）屋嘉宗彦,『マルクス経済学と近代経済学』, 青木書店, 1987

14）関登久也,『宮澤賢治素描』, 協栄出版社, 1943

15）宮沢賢治,『宮沢賢治全集１～３』, ちくま文庫, 1986

16）宮沢清六他編,『新 校本宮澤賢治全集（第１巻～第16巻, 別巻）』, 筑摩書房, 1995-2009

17）国立国会図書館デジタルコレクション,『萬國人名辭書上巻』,『化学本論』